

『小五教育技術』一九五八年十月号（小学館）

社会科・工業の学力とは何か

国立教育研究所 矢口 新

一

第五学年の「目標」の②を見ると、「わが国における工業生産の現状やその発達が国民生活全般に及ぼした影響について理解させ、わが国の発展、産業などとの関係について考えさせる」とある。そして、その理解の内容に当ることが、「内容」の主として⑦⑧⑨⑩⑪、あたりに出ている。

工業について学習した結果、それらのことについて十分にわかったということになれば、学力がついたということであろう。

そこでまず、学習の結果理解する事柄はどういうことかを検討してみよう。⑦には、「わが国の工業は、国民の衣食住や産業の基礎になる資材の生産などの面ばかりでなく、貿易の上からもきわめて重要な役割を果している」と書かれている。これを理解するとは具体的にどうということなのだろうか。この言葉をおぼえるということなら、まあいと易いことと言ってよか

ろう。門前の小僧のようにやれば、五年生にならなくても、一年生でもおぼえないことはない。しかしそんな考え方はおかしいことは言うまでもあるまい。なぜおかしいかといえば、社会の工業の姿を理解するというのは事実を理解するので、言葉を理解するのではないということとを誰もが知っているからである。言葉は事実を理解する時にどうしても使用しなくてはならぬものであるが、それが事実の背景を失った意味のないものになってしまう。

言葉は自身の生命をもっているようであるが、本質は現実に支えられている。しかし現実には無限に深く広い。同じ言葉もそれを使う人によって、まるで異った言葉であるように使われる。それは背後の事実からである。例えば同じく工業という言葉でも、極端にいえばただコーギョーと発音するという段階から、様々な事実について知っている知り方の段階は無限にあるから、使う人によって異なるのである。さてこう考えると、さきあげた内容の我が

国の工業は云々というのは大へんな事実の背景をもっている。いな大変に広く深い事実なのである。わが国の工業という言葉でもどこまで深く認識したら、わが国の工業といえるのか。この⑦にあげられた内容では「国民の衣食住や産業の基礎になる資材の生産などの面ばかりでなく」と書かれてあるが、工業がそういう面に重要な役割を果しているという面だけの事実であっても無限に深い事実がある。衣を生産している工業が何と何であり、それはどんな形の工業なのかの事実認識でも大変なものである。其のことは食と住についてもいえることである。更に産業の基礎になる資材の生産をする工業とは何と何か、それぞれどういう形態の工業であるのか。そういうことが具体的に把握されなければ重要な役割を果していることは理解されないであろう。貿易の上からも重要な役割を果しているというのもこれまた、大変に巾広く奥深い事実である。たった一、二行の言葉で、日本中のあらゆる工業のことを述べて、その重要な役割などといっているが、それが事実の関連としてはいかに認識しにくいものであることか。

今次の改訂指導要領においては、こういうことが、最低必要量として述べられているというが、それは一体どういうことなのであるか。何を以て最低とするのか、この言葉はその点については何も表明してはいないのである。この言

業であらわされた現実、最高にも最低にも無限の事実認識の段階を含んでいる。この言葉は最も抽象的な段階の認識ともいえるが、それは無限の具体的認識を含んでいる。そういうものが全然ないこの言葉だけなら、それはまたナンセンスである。またしかし、無限の具体的事実の認識を意図するならとても一年や二年で学習しきれものではない。

だから、指導要領のとおり学習をするなどといっても、実際上は何が指導要領のとおりなのかをきめることはできない。この項目の意図することを学習したという授業は恐らく無限にあるであろう。このように考えると、この指導要領に従って実際に学習を行うには、非常に多くの研究課題があることがわかる。限られた時間内に、どれだけのことを学習させたら、ここにあげられた内容を理解したことになるのか……。

二

こういうことは、⑧以下の工業について書かれた、どの項目をみても同様に言い得ることである。とすると、この内容に表現されたことを教師がどのように教えるかということが非常に重大な問題であって、その具体的な研究がなされなければ、こういう指導要領が出て、教育の実践の改善、現場の改善にはならないのである。実はその所が教育の改善においては根

本問題であって、これ迄の社会科の発展の問題に指導要領の改訂などという努力しかなされていらないのは是れなものである。書類一本で教師が動かせるという錯覚、事実を忘れて形式だけで教育を考えている官僚的センスがあるのである。といって文部省がそういう具体的なことを書類をもって既定せよというのではない。そういう具体的、実践的な問題について、現場でどのような実践が行われ、どう工夫されているかを分析し整理し、それを情報として、一般に流すような努力をすべきである。そうして、

教師の研究が地についた研究となるように援助することが、いわゆる指導行政のコツであるうと思われる。

それはさておき、現場の教師の研究としては、前に述べたような内容を理解させるについては、具体的実践的な研究が最も大切なことになるが、それはどうしたらよいのであろうか。それは一言にしていえば、教材研究ということにしろられると思う。つまり、どれだけの教材をもつて、児童に提供したら、さきの⑦の項目にある内容を具体的に理解したことになるかということがある。内容としてあげられている理解に到達するのに児童にどれだけの教材を与えるかということである。この場合教材を提出するということは、何も教師が全部それを教師の側から与えるというように考えなくてもよい。

児童が自ら気がついて発見するという指導をしてもよい。しかしそういう形式をとるにしても、教師には本来それが予想されていなくてはならぬ。或ることの理解に必要な具体的な事実というのは、誰が考えても基本的にはかわらないのである。例えば、工業が衣食住のために必要な資材を生産しているということは社会の事実に対する意味であって、その具体的事実は教師に対してであろうと、児童に対してであろうとかわりがない。教師はまずその事実を徹底的につかんでいなくてはならぬ。徹底的というのはもちろん理想的な言い方であるが、本質的にはそういう状態に対していなくては、学習指導はできないのである。

さてしかし、実際に教師がつかんでいる事実を全部児童に広げてみせるとなったら、限られた時間内の教育はできないであろう。そこで、それをどう選択するかということが考えられるのである。どの事実を出して、その理解に到達せしめるかは、実に教師が選択することである。その時に、児童の理解の程度が考慮されるわけである。そしてそれは、基本的には、あくまで実践的に研究されるべきことであって、一般的な理論というものがあるのではない。否一般的な理論、例えば発達段階の論なども、実は実践から導き出されたものにすぎないのである。

こんなことは、既に概論としては、十年来いわれていることであるが、実際に教師が、具体的な

単元に即して、今ここに述べたような方式で教材を研究し、それをどう児童に提出するかを積みあげて来たという例は極めて少ないのである。「わが国の工業は、衣食住の資材の生産に重要な役割を果している」という事実の認識でも、教師がどの程度具体的に把握しているかというところとあやしいと思うのである。極めて常識的にしか押えられていないのではないか。科学的に、整理して押えられていない。どれだけの種類の工業が、どのように衣食住の生産に役立っているのか、工業の種類や、その量がはつきりとかまえられてはいない。児童と大してちがわぬ認識しか持っていないと言ったら言い過ぎであろうか。

更に進んで、例えば⑧の「今日の工業は一部の特異な手工業を除いて大部分が機械生産に移っているが」などという内容になると、言葉でなく、事実としてどれだけこの事の内容を把握しているのだろうか。一部の特殊な手工業という種類を知ってはいるかも知れないが、その手工業が現実はどういうふうな生産を行っているのか、大部分が機械生産に移っているということについても、種類はあげられ、機械を使っているということは知っているかも知れないが、具体的な事実をどれだけつかんでいるのだろうか。教師がまずそういう事実を知らないのではないか。実際に工場に行ってみたら旋盤機械が動いているくらいはわかるかもしれないが、くわしく見ると機械がどれで、どこにど

う材料がかかっているのかが分からないのが多いのではないか。そういうことでは、同じく内容の⑧に書かれている「機械生産は手工業生産と比べて、新しい動力や機械の利用分業のしくみ、大量生産などの点でも著しい特色をもち」などということもあつて著しい特色がどこにあるかということも本当には理解させることはできないのである。分業というのは仕事を手わけしてやるなどという説明、それに毛のはえた程度で学習が行われることになるのである。

もしそういう点を教師が、具体的につかんでいたらまず本当の学習が行われる準備ができたことになるが、次には、子どもにそれを教材として提出しなくてはならないが、その時にも、具体的、現実的な教材が必要だということを痛感するであろう。そういう教師ならば、視聴覚教材の利用などということがやましくいわれなくても、もっとそれを利用するはずであるが、現在、そういう所へ関心の向いている教師はごく少ない。視聴覚教育などという上、上に述べたような教材の問題などというように考える人は稀で、子どもに劇映画をみせることだけに考える人が圧倒的に多いのである。つまりは教師が、先ず現実的、具体的に社会の事実をつかんでいないからである。

三

ほんとうに社会がわかるということは具体的事実即して、その意味をつかんだというこ

とである。具体的な教材とその意味の把握、そこに学習があるのである。そういう学習をしたとき、学力がついたというのである。こういう学習を積み重ねていく、児童は自分の前に出て来る諸々の社会の現象でも、その意味でも、概念でも、いつも具体的事実と意味を関連させて整理して自分で自分なりの見方をして社会をつかむであろう。そういう練習をするのが学習だといつてもよい。それは算数の学習で、事実問題を与えて、それをとくことを練習させ、数学的に社会や自然の現象を分析させるのとおなじである。社会の学習は、社会の具体的現象を計算して、答を出すことを練習させるのである。

社会について概念だけの学習をするのは、算数の答えだけを教えているようなものである。それでは自ら問題をとく力はつかないので、社会の学習の場合もそうである。社会現象を計算する力が社会科の学力といったらよいかも知れない。それは社会の現象を見て、それを整理するということ学習を繰り返すこと以外にないのである。いろいろなことを知っているという風に言うときのいわゆる知識は、実はそういう学習の中から沈殿した時に真の知識となるのである。